



「駅の詩」をテーマにした第5回 アート&デザイン新世代賞の 受賞6作品を1月10日（月・祝）から下北沢駅に展示

Design Stories
SHIMOKITA COLLEGE 新世代賞実行委員会
小田急電鉄株式会社

2022年1月7日

Design Stories（主宰：辻仁成）、SHIMOKITA COLLEGE 新世代賞実行委員会、小田急電鉄株式会社（本社：東京都新宿区、取締役社長：星野晃司 以下「小田急電鉄」）の三者は、作家の辻仁成氏が審査員長を務める「アート&デザイン新世代賞」（以下「新世代賞」）の第5回受賞作品を、2022年1月10日（月・祝）～1月23日（日）までの間、小田急線下北沢駅にて展示します。



駅展示のイメージ

【新世代賞とは】

新世代賞は、芸術家、デザイナー、建築家などを目指す25歳以下の若いクリエイターのための新人賞です。2017年に作家でDesign Stories主宰の辻仁成氏が立ち上げ、2020年までに4回実施してきました。

【最終選考会の実施と受賞作品の決定】

「駅の詩」をテーマにあらゆるアート表現を対象とした第5回新世代賞では、音楽、詩、小説、アート、デザインなど多様な分野の作品が寄せられました。2021年11月20日（土）に

実施した最終選考会では、最終候補に残った10作品が審査の対象となり、司会者はアメリカの大学に在籍するSHIMOKITA COLLEGE出身の大学生がアメリカ オハイオ州から、審査員長を務める辻仁成氏はフランスパリから参加し、日米仏3カ国をつないでオンライン形式にて実施し、最優秀賞1作品、優秀賞1作品、特別賞3作品を決定しました。

また、SHIMOKITA COLLEGE 新世代賞実行委員会による選考でSHIMOKITA COLLEGE賞1作品も決定しました。

今回の新世代賞は、辻氏が長らく拠点をおいていた下北沢で初開催しました。駅において作品発表の場を創造することを通じて、次回以降の挑戦者を促すことを目的としています。第6回新世代賞も三者で下北沢にて開催することが決定しており、来夏頃に募集を開始する予定です。

<最終選考会・受賞作品：<https://www.designstoriesinc.com/worldfood/no5shinsedai/>>

【下北沢駅での受賞作品の展示】

第5回新世代賞の受賞作品を、以下のとおり下北沢駅に展示します。



【第5回 アート&デザイン新世代賞 受賞作品】

■最優秀作品（1点：賞金30万円）

・森川芹さん：誰かを待つ誰かへ。

『誰かを待つ誰かへ。』 駅の詩五十首															森川 芹					
あ	い	う	え	お	か	き	く	け	こ	さ	し	す	せ	そ						
雨が降れば、みんなの住処。 家を問われ、駅を答える。	裏口が、密かにわたしのお気に入り。 駅弁は冷たいのが、おいしい。	「お疲れさま」、知らない背広に映る深夜。	改札という、断絶。 北からやってきたの、北千住から。 口から溢れそうでつい、「またね」と打ち消す。	蛍光灯は、暗いくらいがちょうどいい。 こどもに舞戻る、迷子のこども。	さんざん泣いたね、きつぷ売り場 視線だけの、コミュニケーション。	スーツまじえど、一人間。 線路を、一度だけでも歩けたら。 そろそろ着いちゃ、ね。				たまにはゆっくり、各駅停車で。 小さな駅に、大きな浪漫。	突き刺さる、時刻にその目流れるたびに。 手を繋ぐの、手すりの代わりに。	隣駅、垂り過すのもわるくない。	何度も振り返って見た、ばかりみたい。 「2分遅れます。」こつそりとあなただけのたくて、 温もり求め、キミの最寄りへ。	猫背だから、すぐに分かったよ。 飲むと、決まって駆け込み、籠もる。	端まで歩くと、なんか落ち着く。 ひらめき宿る、駅前喫茶。	ふらつかないコッ、そつと教え。 ベンチ腰掛け、ると、うとうと。	はつと一息、ただいまホーム。			
ま	み	む	め	も	や	ゆ	よ	ら	り	る	れ	ろ	わ							
待ちくたびれた手に、冷めたコーヒー。 みだらな姿を許して、始発。	ムードを壊す、「間もなく」アナウンス。 めくるめく人混みがその、恋しいの。	「もつと一緒に」、発車の瞬間、み上げる。	やるせない、涙飲んだ踏切前。 夕暮れ顔す、日本のわびさび。	世の中を、肌で感じる。	ラーメン香る、わたし即降る。 理性が勝る夜も、ある。	流転より、終点欲す。 「連絡してね」は、脈ありですか。	路上ライブを今日は、聴きたい。	忘れないでね、という気持ち を忘れちゃった。きち	んと、「おさらば」、最後くらい。											

【コンセプト】

この作品を通して、「誰かを待つ」誰かの琴線に触れ、その人の駅での記憶を呼び起こしては、誰かに想いを馳せられるような、温かなひとときを提供できればと思いました。そんな駅にまつわる気付きや感情の揺れ動きを、本作品では五十音ではじまる言葉で切り取り、並べてみました。

【審査員のコメント】

「駅」には色んな人がいて、色んな感情の人がいる。それを作品から感じられた。さらに「日本の駅」だからこそ起きるという点でも共感できた。（尾田大介）

読むだけでくすぐったくなる気持ちになる。日常のちょっとしたドラマをくみ取るのが上手で、完成度に対してもぐっときてグランプリにふさわしい。（中村暖）

■優秀賞（1点：賞金10万円）

・藤本泰成さん：奏でるきかい

いつもの機械で、
人を感じる機会の場へ

奏でるきかい



ひとりでは奏でられない音楽
だからこそ感じるつながり



今日も改札機は“ピッ”という音をひたすら
鳴らし続けている。この光景はなんだか冷淡で
面白みに欠けると感じてしまう。

私は、このありふれた改札機に注目し、人との
繋がりを感じることのできる存在に変化させ
たいと考えた。現在はコロナウイルスの影響に
よって人との繋がりを感じることができなくなる機会
が大幅に減少しているのは明らかである。コロ
ナ禍であっても毎日多くの人々が通過する改札
機にはほんの少しの工夫を取り入れれば、人との
つながりを実感できる機会を生み出せると私は
確信した。

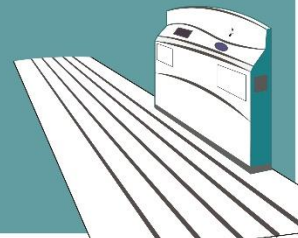
そこで考案したのが「奏でるきかい」である。
この改札機は1人のタップで曲が流れる。だが
1度のタップで曲は数秒（約2小節）しか流
れない。しかし続けて他の人が通過することで
曲は継続される。偶然その改札を通過した人同士
で1つの曲をつなげて演奏することで、人との

つながりを実感できるだけでなく、つながること
の楽しさを音色を通して味わうことができ
る。また、自分が直接改札を通らなくとも聴衆
としてその音色でつながりを感じることができ
る。

ここでいう曲は、クラシックのような誰もが
聞き覚えのある心が安らぐものが良いと考え
ているが、地域に縁のある曲などを採用して地
域性を持たせても良いと考える。

「奏でるきかい」は一つの改札口に1つだけ
設置することを想定している。理由は曲を継続
させやすかったり、1つの音色が響くようにす
るためだけでなく、繋がりに参加することを強
制したくないからでもある。

本改札機とそれに続く通路は五線譜をイメー
ジしたデザインに変更し、この改札機を壁際し
やすくしたり、この通路に並んでいる最中のわ
くわく感を振き立てることを試みた。



【コンセプト】

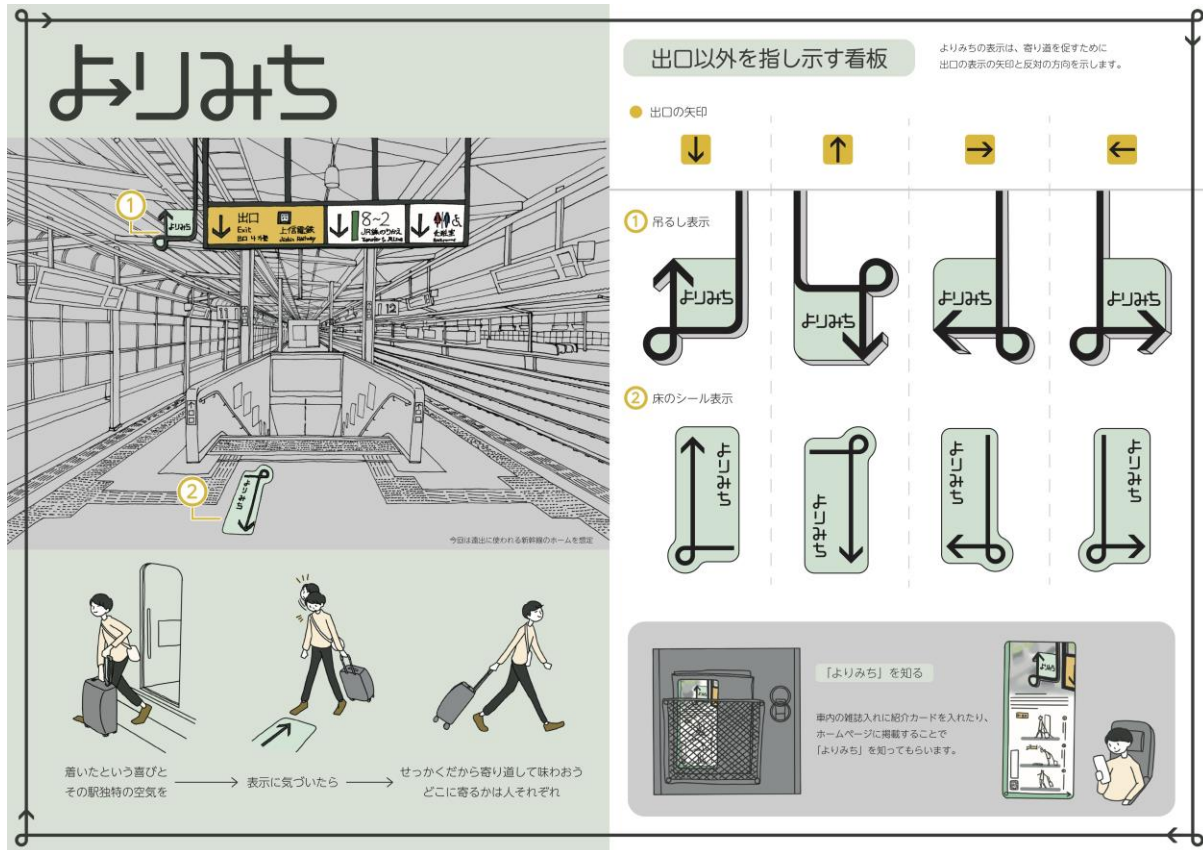
どれも“ピッ”と淡々と音を鳴らす改札機が、1つくらい美しい音色が流れても良いのではないかと考え、何気ない改札機で人との繋がりや、繋がることの喜びを味わうことができないかと、考え付いたのが「奏でるきかい」である。

【審査員のコメント】

改札のピッという無機質な音が、美しい音色に変わり音楽を奏でるとするのはロマンチックな発想である。このアイディアを元に改良して、改札を通るときの音を1人1人が選べて、それらがたまたまつながって新しいメロディが生まれるような仕掛けがあっても非常に面白いと思う。（甲斐徹郎）

■特別賞（3点：賞金5万円）

・島田智世さん：よりみち



【コンセプト】

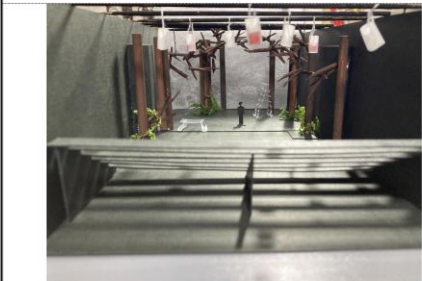
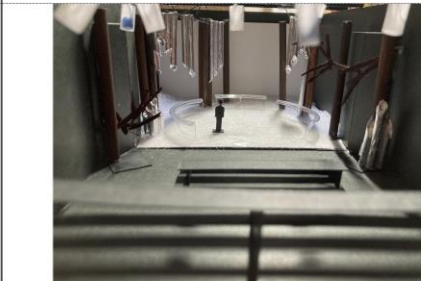
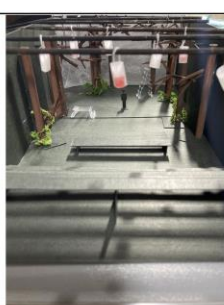
「よりみち」は、出口と反対方向を指し示す矢印の表示です。時間をかけて到着したのに、その瞬間をほとんど味わうことなく足早に駅を去るなんてもったいないではありませんか。もう少し駅のその土地の空気や到着の余韻を味わいませんか。帰省でも旅行でも何でも、到着したという喜びを味わいませんか。「よりみち」は、そういった思いから考えました。

【審査員のコメント】

駅の中の寄り道には限界があるが、周辺にも行けるような「よりみちパス」みたいなのがあれば面白いのではないだろうか（辻仁成）

駅を降りて、何となくどこかにいきたい気分の時に目にしたら様々な発想が生まれる。多くの駅にこのサインがあってもいい。こんな人の流れがあったら素敵だ。（尾田大介）

・輝路さん：駅の唄（舞台美術プラン）

【劇場】 下北沢・本多劇場			
舞台「駅の唄」			
【舞台美術共通部分】 ホリゾント幕使用。舞台タッパに合わせて木が6本。客席前の端に上下1本ずつ、机・脚立・置物は、場面によってそれ以外として使う。 仕込み時に高作品の吊り物は仕込み、交互に飛ばしてプリセット。2作品間の幕転換は、舞台監督さんと要相談。			
あらすじ			
身近にある「駅」に繋がる音を軸にしたストーリー。 駅で奏でる曲を繋ぎ続けることが、ストーリーの大きな筋。その音を繋げるのは、その駅で起こる出来事。 主人公は、駅を擬人化。 (露骨にわかる訳ではなく、音動で察してもらう)			
歴史が最も長い駅＝昔版と最も新しい駅＝今版と交互に上演。 キャスト・細かい出来事を交えて上演。 2作品の共通点は「街の人々に愛されている駅」。 出来事によってどんな色・音が鳴るのか。			
【昔版】	【今版】		
			
歴史が長い駅(電崎駅がモチーフ)。 電車の数が少ない駅、鳥の鳴き声や風の音が聞こえる自然の中、穏やか、そんなに事件はないが、時折寂しさがある。 【舞台】全体的に森の中にあるかのような。 木が特徴的、叩くと木霊のような音がする。 音が少し手入れされているように生えている。 机と脚立だけ近未来感。 床は、黒。 【客入れ音】鳥の鳴き声や風の音。 【客席上部】両側の鉄りで使われている窓枠かよう。開場時から全部ぼんやり暗く光っている。 上演中はいつかぼんやり光っていても見えない。 客出し時はいつか光っている。 【ホリゾント】一日の光景に合わせてゆっくり変化。回廊シーンでは急に変わるかも。 【乗客の種類】木等、優しく響く音。 【季節】2・3月頃、春前。 主人公は、70代男性。 基本、目向ぼつでもするようになっている。 時折木霊可也、曲を作ろうとする。草花の手入れを気が向いたらする。 脚立を掴まぐれに使う。 毎日同じである日常を大切に生きている。人や動物植物との出会いを大切に。 駅員の代わりに、郵便局員(30代前半)、学校の行き帰りの女子高生。 毎日決まった時間に来る。 【出来事】※(内は私の想像演出。 ・動物との短い接触場面。(一瞬ホリゾントの一部が赤くなる？その後から少しの間木霊の音が変になる) ・乗客になるかもしれない。(スーツを着た人達が3人乗る？) ・女子高生の靴のモデルをした子(女子高生は美大志望、合格報告あり) など 登場人物たちが木を叩くのもあり、出来事や心情により音が変わる。 それらの音を辿り出しても丁寧に主人公が、繋げて叩いて繋がり。 最後のシーンで、夕日が沈む瞬間ホリゾントのみ明るく他の影になるように。(※左下に写真あり)	新しく建てられた駅(流輪ゴートウェイ駅がモチーフ)。 現代、近未来。人、電車が、多量。開通して良い。都会にある人工的な自然感を出したい。水を意識。 【舞台】真やかな空間とコンサートホールを合わせたかのような場所。改札・机・脚立などとして使える透明な置物。 床は、鏡面ツツツから奥に向かって青色のスペースあり(川のように)。 【客入れ音】水音が木霊のように響く音。 【客席上部】両端・客出し時、水音の音に合わせて青色がいつたり消えたりする。全部ではない。 上演中はいつかぼんやり光っていても見えない。 【ホリゾント】白ベースに濃い青・黄色が駅の広告のように常についている。出来事に連動に変化(沢山の色を切り替え早く使う)。 【乗客の種類】イブイブ、高く軽やかな音。 【季節】4月頃、春。 主人公は、20代半。 いつも真やかに挨拶。いつも全力でキズキと動く。人の感情や状況に敏感。落ち込むこともあるが切り替えが早い。 花が好き、パイプを叩いたり脚立を弾き、それを楽器におこす。 毎朝駅員さんと挨拶も曲の進捗状況を報告。 登場人物が多い。それぞれの生活を少しずつみたりしたい。主人公と会話をすることはそれぞれ(挨拶を返すか否かなど)。 主人公は全員と関わろうとする。相手の反応に合わせて敏感に反応。 【出来事】※(内は私の想像演出。 ツツツの奥の下に置かないように箱を作った(大切な家族みたいに繋がる) ・コロナ規制。人身事故(ホリゾントの一部赤黒くなる、主人公がナイフになったり切羽詰まる？)(事件が起きた瞬間、ガラスが割れた音がする) ・子供との交流(スタンプラリーや遠足？何かを教えたり) 登場人物たちが木を叩くのもあり、出来事や心情により音が変わる。 それらの音を主人公が、気持ちよく繋いで繋がり。 最後のシーン、ホリゾントは真やかに風が通っているかのような色。		
			

【コンセプト】

「駅の詩」という3文字から得られるイメージで簡単なストーリーを作り、「もしも舞台化したらどんな美術プランにするか」を模型にしました。「駅の詩」という題目の舞台を上演することになった場合、どのような舞台美術にするか。観終わった人達が、日常にある音を少しでも意識してくれるように。

【審査員のコメント】

70年前の駅と現代の駅を交互に織りなす美術のプランであることが非常に面白い。言葉を使わずに言葉を描いているように感じさせる作品である。(辻仁成)

・Lala Chou & Mimmy Chouさん：WHO AM I（音楽とアニメーション（映像））

作品URL：https://youtu.be/pQZh_I234Dk

【コンセプト】

私達は、徐々に心を防備するかの様に感情を抑え込み始める。そして、この世界の不公平に気付くと同時に自分の小ささを思い知らされる。だが、美しく憂鬱で、変化が激しい時代の中でも、春夏秋冬の繰り返しの様に、決して変わらない物もある。この作品を通し、同じく泥沼にはまっている人が同感と理解を得て、救われる気持ちになってくれればと願っている。

【審査員のコメント】

希望と再生、悲しみから喜びへというコロナ時代における、その中で考える思念が電車の走りと共に観客に心をつないでいく非常に優れたアニメーションである（辻仁成）

音楽がとにかく好きで素晴らしい。始まった瞬間には辛い話が始まるかと思わせるのだけれども、アニメーションが持っている不思議さとピアノの音で軽やかにさせてくれて、乗り越えている感じを持たせてくれる。（奥村大）

■SHIMOKITA COLLEGE賞（1点）

・AFTER I DIEさん：STATION（音楽）

作品URL：<http://youtu.be/XA80ztJA5ME>

【コンセプト】

身体は都会にやって来たが、心はそうではないらしい。気がつく私の心は故郷の方をみている。「果物みたいなICカード」は使えないけれど、緑に囲まれた「瑞々しい改札」のある終着駅に「きみ」が待っていてくれたなら。駅という場所が、より愛すべき場所に感じられるだろう。

【SHIMOKITA COLLEGE新世代賞実行委員会のコメント】

SHIMOKITA COLLEGE生が作品を見て、SHIMOKITA COLLEGEに芸術の風や想いを吹かせて欲しい、という想いで選考しました。

この曲を初めて聴いた時、歌声やメロディの美しさに心震え、AFTER I DIEさんの歌や、音楽に対する気持ちがカレッジに広がって、カレッジ生との創発につながっていく風景が鮮明に目に浮かびました。一緒に暮らしながら学び、音楽ができる日を楽しみにしています！

※SHIMOKITA COLLEGE賞受賞者は特典として、1ヶ月間SHIMOKITA COLLEGEに無償で居住いただくことになっております。

【第5回 アート&デザイン新世代賞 概要】

■作品テーマ：「駅の詩（うた）」

・駅の詩（音楽、詩、小説、アート、デザインによる募集）

■募集期間

・2021年9月1日（水）～2021年11月7日（土）

■結果発表・授賞式

- ・審査会、結果発表、授賞式：2021年11月20日（土）

■賞

- ・最優秀賞（1点）：賞金 30万円
- ・優秀賞（1点）：賞金 10万円
- ・特別賞（3点）：賞金 5万円

※上記の賞とは別枠で、SHIMOKITA COLLEGE居住者有志が審査するSHIMOKITA COLLEGE賞を設けました。受賞者は、2022年2月からの1カ月間、SHIMOKITA COLLEGEに学費（居住費用）無償で居住いただけます。

■審査員

- ・辻仁成：作家、Design Stories主宰、審査員長
- ・甲斐徹郎：建築・まちづくりプロデューサー、株式会社チームネット代表取締役
- ・尾田大介：株式会社オーバーシーズ取締役
- ・柏雅康：下北沢商店連合会会長
- ・宮崎晃吉：建築家、株式会社HAGI STUDIO代表取締役
- ・奥村大：ミュージシャン、ロックバンド「wash?」のvo. 音楽プロデューサー
- ・中村暖：クリエイター、第1回新世代賞最優秀賞受賞者

■主催

- ・Design Stories
- ・SHIMOKITA COLLEGE 新世代賞実行委員会
- ・小田急電鉄株式会社

■三者開催となった経緯

辻仁成氏が若い頃から長らく拠点をおいていた下北沢で新世代賞を実施したいと考えていたところ、「下北線路街」の開発を手掛ける小田急電鉄と出会い、下北沢で駅の詩をテーマに第5回新世代賞を開催することになりました。新世代賞の開催を通じて次世代の“原石発掘”を目指す辻氏に、小田急電鉄が居住型教育施設SHIMOKITA COLLEGEの居住者を巻き込んで共同で実施したい旨を申し出たところ、辻氏に賛同いただき、同施設の居住者有志で実行委員会が組織され、三者での開催となりました。

■審査員長 辻仁成氏による総評

5年前に、新世代賞を創設した。この困難な時代にあって、若い人こそが次の時代を担うのだから、その芽を育てるための新たな荒野が必要だと思った。コロナ禍になり、ますますその意味が強く大きくなった。そして、今年もまた多くの新人たちとの出会いに恵まれた。きっと、人類はこの困難を乗り越えることが出来るはずだ。新しい才能に未来を託したい。

以 上